

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 鄭 在 恩

論 文 題 目 日韓母語話者及び韓国人日本語学習者における「再勧誘」行動に関する語用論的研究

論文審査担当者

主 査 名古屋大学准教授 奥田 智樹

委 員 名古屋大学教授 井上 公

委 員 名古屋大学教授 堀江 薫

論文審査の結果の要旨

本論文は、相手を一度誘って躊躇された後に、その相手にもう一度誘いに応じるように働きかける行動を「再勧誘」と定義し、日本語母語話者、韓国語母語話者、韓国人日本語学習者に見られるこの再勧誘行動について、語用論的見地から調査および考察を行ったものである。再勧誘は我々の日常生活において頻繁に見られ、しかも最初の勧誘より様々なストラテジーが現れやすいと考えられることに注目し、そこに現れる日韓両母語話者のコミュニケーション・スタイルや対人意識の違いなどについて明らかにしようとしている。

以下、本論文の概要と評価を述べる。

[本論文の概要]

本論文は6章からなる。

「第1章 序論」では、再勧誘が注目されるべき理由を含めた本論文の背景、意義、目的について述べた後、本論文の研究課題と全体の構成を示している。研究課題としては、日韓両母語話者について再勧誘に現れる配慮の仕方にとどのような類似点や相違点があるか、また韓国人日本語学習者について再勧誘にどのように母語や学習環境の影響が現れるか、といった問題が掲げられている。

「第2章 本研究の理論的枠組みと先行研究」では、本論文の考察における理論的枠組みとなる発話行為理論、ポライトネス理論、異文化間語用論、中間言語語用論を概観しつつ、それらに基づいた先行研究を紹介し、それぞれの問題点を指摘している。勧誘行動に関する研究の問題点としては、まずその数が少なく、特に躊躇された後の再勧誘行動に関する研究や勧誘者と被勧誘者の意識に関する研究が皆無であることが述べられている。そしてその上で、上述の諸理論を援用した本論文における考察の方向性に言及している。

「第3章 研究方法」では、本論文における調査の概要と分析の方法が述べられている。本論文の調査は日韓両母語話者と韓国人日本語学習者それぞれ30名を対象としたもので、勧誘者の被勧誘者に対する配慮行動に関するDCTを用いた質問紙調査(調査1)および被勧誘者についての意識調査(調査2)の2つからなる。調査1については、「勧誘を相手(誘われる側)に躊躇されたら、その後どのように言うか(設問①)」、「なぜそのように(設問①の回答のように)言うか(設問②)」という設問を設け、調査2については、「勧誘者の再勧誘に躊躇したらそれ以上誘ってこない場合、どのように感じるか(設問①)」、「勧誘者の勧誘に躊躇したら2回も3回もしつこく誘ってくる場合、どのように感じるか(設問②)」という設問を設けている。それぞれの調査に用いた調査票には、相手の上下関係(目下、同等、目上)と相手に与える負荷の度合い(小、大)により6場面を設定している。また、データの分析にあたって、設問1の調査①のDCT調査で得られたデータは周辺部分と主勧誘部分に分けた上で、周辺部分については「あいづち(同意、共感、了解)」「相手への負担軽減」「詫言」「遺憾表明」の4つの意味公式に分類し、主勧誘部分については「都合・理由の尋ね」「代案・解決策の提示」「誘導発話」「共同行為要求」「勧誘の諦め」「次回への勧誘」の6つの意味公式に分類している。一方、調査2の設問①で得られた回答は「気にしない」「ホッとする/助かる」「勧誘に応じない/断る」「寂しい/残念に思う」「気になる」「申し訳ない」「考え直す」「勧誘に応じる」「その他」に分類し、設問②で得られた回答は「気にしない」「勧誘に応じない/断る」「押し付けが

論文審査の結果の要旨

ましい／しつこい」「面倒だ」「苛立ちを感じる」「悩む／困る」「申し訳ない」「嬉しい／有難い」「勧誘に応じる」「その他」に分類している。

「第4章 結果」は第3章で述べた各調査の結果を報告している章である。具体的には、これらの結果を分類した上で、グループ間および各グループの場面間の回答に有意差が見られるのかを調べるためカイ二乗検定を行い、さらに調整済み残差を求めて、グループと回答のどの組み合わせにおいて有意差が見られるのかを分析している。以下、各調査の設問ごとに得られた主な知見を述べる。

調査1の設問①：周辺部分については、各グループに見られる共通点として目上の相手に対する「詫び」の使用が多かった。主勧誘部分については、各グループに見られる共通点として負担の度合いの大きい場面で「代案・解決策の提示」「誘導発話」の使用が多く、負担の度合いの小さい場面で「都合・理由の尋ね」「次回への勧誘」の使用が多かった。相違点としては、目下の相手に対する負担小の場合に、日本語母語話者では「代案・解決策の提示」「勧誘の諦め」の使用が最も多かったのに対し、韓国語母語話者では「誘導発話」の使用が最も多かった。韓国人日本語母語話者には両母語話者の傾向が見られ、「誘導発話」と「勧誘の諦め」の使用が最も多かった。男女差は周辺部分の韓国語母語話者と韓国人日本語学習者にのみ認められ、前者では男性は「相手への負担軽減」の使用が多く「詫び」の使用が少なかったのに対して、女性は逆に「詫び」の使用が多く「相手への負担軽減」の使用が少なかった。また後者では男性は「あいづち」の使用が多く、女性は少なかった。

調査1の設問②：主勧誘部分の意味公式の使用に見られる意識に、各グループ間で顕著な違いが見られた。同じ意味公式を使用する場合でも、日本語母語話者は相手に考える余裕を与え、相手に判断を委ねるといった回答が多かったのに対して、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は自分の気持ちを相手にはっきりと伝え、少し強引に誘うという回答が多かった。また韓国人日本語学習者には韓国語母語話者に近い回答が多かった。

調査2の設問①：日韓両母語話者に見られる共通点として、負荷の度合いが大きい場面で「気になる」の数値が大きく、負荷の度合いが小さい場面で「気にしない」の数値が大きかった。また日韓両母語話者に見られる相違点としては、負荷の度合いが大きい場面で日本語母語話者は「ホッと／助かる」の数値が大きかったのに対し、韓国語母語話者は「申し訳ない」の数値が大きかった。全てのグループで男女間に有意な差は認められなかった。

調査2の設問②：場面と回答に有意な関連性があるのは韓国語母語話者だけであった。韓国語母語話者は、目上の相手に対する場合には「悩む／困る」と「押し付けがましい／しつこい」の数値が大きく、目下の相手に対する場合には「勧誘に応じない／断る」の数値が大きく、同等の相手に対する場合には「気にしない」と「苛立ちを感じる」の数値が大きかった。また、全てのグループで男女間に有意な差は認められなかった。

「第5章 考察」では、第4章で得られた結果をもとに、再勧誘の発話に見られる言語表現を取り上げながら、日韓両母語話者の間に見られる相違点が生み出される要因や、韓国人日本語学習者に見られる問題点などについて考察している。

まず、再勧誘発話に見られる日韓差として、韓国語母語話者は相手の躊躇する理由や都合について立て続けに質問をする発話が多く、また相手の都合を尋ねた後にさらに誘い続

論文審査の結果の要旨

ける傾向が見られた。また、相手の領域に立ち入った発話や、友情を強調して訴える表現、冗談めかした表現、からかったり貶したりする表現が多いことが特徴的であった。再勧誘をやめる際には、次回への勧誘に具体的に言及する発話が多かった。それに対して、日本語母語話者は相手の負担を軽減させる表現を多く用いて、相手に無理に押し付けないように配慮した間接的な誘い方をする傾向が強かった。また、ストレートに誘わず、相手に判断を委ねたり、相手に考える余裕を与えたりする間接的な表現を用いて誘い続けることが特徴的であった。再勧誘をやめる際には、急に誘ったことを謝ったり、相手が躊躇したことに対して気にさせないように配慮したりする発話が多かった。

次に、ポライトネス理論からの考察として、日本語母語話者は相手との間に一定の距離を保ちたいという欲求を満たすネガティブ・ポライトネスに重きを置く傾向があるため、相手のネガティブ・フェイスに訴えかける表現が好まれ、それが良い人間関係を築き、維持するための対人配慮に繋がると認識されていると言える。それに対して、韓国語母語話者は相手に認められたいという欲求やお互いの心理的距離を縮めたいという欲求を満たすポジティブ・フェイスに重きを置く傾向があるため、積極的に相手のポジティブ・フェイスに訴えかける表現が好まれると言える。また、韓国人日本語学習者の発話には、韓国語母語話者の傾向と考えられるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの傾向と、日本語母語話者の傾向と考えられるネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの傾向の両方が観察された。

また、異文化間語用論からの考察として、まずコミュニケーション・スタイルの相違の点では、日本語母語話者はじっくりと相手の話に耳を傾け、相手に負担をかけないように働きかける傾向が強いのにに対し、韓国語母語話者は相手の反応や共感を素早く示すことがより好まれる傾向がある。また、対人配慮意識の相違の点では、日本語母語話者は相手に負担をかけないように常に心がけており、相手の負担を少なくし、相手との間に気まずさを作らない傾向が強いのにに対し、韓国人日本語学習者は相手の状況や気持ちに共感を示しながらも、自分の意向や気持ちを相手に明確に伝えてそれを相手に分かってもらおうとする考え方が相手への配慮とされている。さらに、相手とのテリトリー意識の相違の点では、日本語母語話者は相手との距離を大きく取る傾向があるため、お互いにとって良い距離感を保ちながら相手と関わることを望ましい付き合い方であると捉えているのにに対し、韓国語母語話者は相手との距離を小さく取ろうとする傾向があるため、一步踏み入って相手と関わることを好む傾向がある。

最後に、中間言語語用論からの考察として、まず語用論的転移の点では、韓国人日本語学習者は調査1において「詫び」の使用が少ないという点が韓国語母語話者に類似している。また、調査2の設問①に見られる相手に再勧誘をやめられた際の意識に関して、「ホッとす／助かる」の回答が少なく、「寂しい／残念に思う」の回答が多い点や、調査2の設問②に見られる相手に誘い続けられた際の意識に関して、「押し付けがましい／しつこい」の回答が少なく、「嬉しい／有難い」と「勧誘に応じる」の回答が多い点についても、韓国語母語話者との類似性が観察された。また、学習環境の影響の点では、韓国人日本語学習者は調査1において周辺部分の発話数が多い点で日本語母語話者に近い傾向を示していた。また、主

論文審査の結果の要旨

勧誘部分の「勧誘の諦め」と「次回への勧誘」の使用が多く、その際に相手に配慮した表現を用いた発話が多い点も日本語母語話者に類似していた。韓国人日本語学習者特有の特徴としては「遺憾表明」の使用が多いことが挙げられる。

「第6章 結論」では、本論文のまとめを行い、本論文で得られた研究結果を日本語教育や異文化理解教育の現場にどのように応用できるかについて考察した後、残された今後の課題について述べている。

[本論文の評価]

本論文のオリジナリティは、従来取り上げられることのなかった再勧誘という言語行動に極めて重要な今日的意義を認め、それに正面から取り組んでいる点にある。勧誘行動自体に関する研究はすでに多数存在するが、再勧誘行動に関する研究というのはほとんど例がなく、本論文ではそれに注目することによって、日韓両母語話者に見られる語用論的特徴やその背景にある意識の違いを新たな角度から明確にすることに成功している。また、両母語話者と韓国人日本語学習者の間の比較についても、DCT調査の綿密な立案に基づいて精緻に分析を行っており、そのことも本論文全体の質を高めているものと評価された。

ただし、口述試験においては分析や考察に関わる注意点や問題点もいくつか指摘された。例えば、意識調査の結果処理において数多くの要因を設定してカイ二乗検定を行っていることについて、データの数が相当多くなければ全体の統計的信頼性に疑問符が付くことがあり得るという点、理論的枠組みとして援用されている諸理論のうち最も重視しているのが何なのかが不明確であり、そのため本論文自体の最大の貢献が何であるかが分かりにくくなっている点、会話データの収集は専らDCTのみによっており、そのデータを自然会話などによってチェックしていないため、実際の言語活動と距離のある結論となってしまう点などである。しかし、これらの点はいずれも本論文の本質的な価値を損なうものではないと見なされ、申請者の今後の研究における改善に期待することとされた。本論文が、日本語教育や異文化理解教育の分野に様々な示唆を与え得る高い学術的価値を持った力作であり、将来的にはさらに大きな社会的影響力のある公的な場面での交渉ストラテジーの研究にも発展する可能性を持つ、確固たる存在意義を有するものであることは、審査委員全員が一致して認めるところであった。

以上の評価から、審査委員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。

